津和野町埋蔵文化財報告書

高田地区埋蔵文化財
分布調査概要報告書

1991

津和野町教育委員会

高田地区埋蔵文化財
分布調査概要報告書

1991

津和野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成２年度に国、県の補助金を得て津和野町教育委員会が実施した埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。
2. 調査を実施した地区は、島根県鹿足郡津和野町大字高峯通称高田地区である。
3. 調査を実施した遺跡は、高田遺跡である。
4. 調査にあたっては、下記の方々にご指導いただいた。

山口大学助教授	中　村　友　博　氏
津和野町文化財保護審議会会長	鈌　川　兼　光　氏

5. 本書に用いた方位は、遺跡分布図およびテストピット配置図は真北を示し、その他は磁北を示す。
6. 本書中に用いた記号ＴＰは、テストピットの略号である。
7. テストピット実測図のスケールは、1/40である。また、遺物実測図のスケールは、土器は1/4、石器は1/2である。
8. 写真図版中の遺物番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。
9. 調査によって作成された記録類および出土遺物は、津和野町教育委員会に保管されている。
10. 調査の体制は、下記のとおりである。

調査主体	津和野町教育委員会教育長	山　根　津知夫
調査指導	島根県教育委員会	
事務局	津和野町教育委員会教育次長	山　本　朋　子
	〃　文化財係長	長　嶺　常　盤
	〃　文化財係	北　浦　弘　人
調査担当者	〃　文化財係	北　浦　弘　人

Ⅰ．調査にいたる経緯

津和野町では、昭和52年以来町内各所で圃場整備事業が実施されてきた。埋蔵文化財の保護と事業計画の調整については、それまで断片的な資料に頼らざるを得ず、郷土史家岩谷建三氏（故人）の精力的な資料の蓄積によって、遺跡の周知化がなされてきたにすぎなかった。津和野町教育委員会では、圃場整備事業計画の策定後、事業主体者である津和野町土地改良区と、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきたが、このような状況においては、調整資料の不備は否めないものであった。早急に事業計画地内の埋蔵文化財について、より詳細な分布状況を把握し、保存についての措置を講じる必要性が生じた。当初は、島根県教育委員会、山口・島根両大学にご助力いただき、分布調査を実施してきたが、平成元年に埋蔵文化財担当職員を配置するにいたって、町として対応できる体制を整えることができた。

昭和61年、町内中座（なかざ）地区で、圃場整備事業に先立つ分布調査を、山口大学及び島根大学両考古学研究室に実施していただいた。その際、中座（なかざ）遺跡群中の山崎（やまさき）遺跡（第１図10）において、遺構及び遺物包含層の良好な遺存が確認され、平成元年度にいたって、本調査の運びとなった。高田（たかた）地区においては、昭和63年に島根大学考古学研究室によって表面踏査を実施していただき、広範囲にわたる近世の遺物散布が確認された。これを受けて平成元年に事業計画範囲のうち約３haを対象として分布調査を実施し、翌平成２年に約3,000㎡について本調査を行った。今回の分布調査は、この本調査地の東側及び北側に隣接する地区で、約３haの範囲を対象とした。津和野町教育委員会の直営事業とし、国、県の補助金を得て実施した。調査は、事業計画を勘案しながら合計24カ所のテストピットを設定して行い、試掘総面積は、174㎡となった。

調査に際して、以下の方々のご協力を得た。記して深謝いたします。（敬称略）

土地所有者	三浦源太郎	下森　正敏	三浦　禮駒	三宅　キク	三浦　太一
	倉益　増衛	舛成　義一	三宅　　勲	三浦　　潤	
調査協力	角田　徳幸	谷口　恭子	舛成　義一	倉増ヨシエ	三宅　晴子
	河野　茂子	河野里五郎	三宅　キク	石井　信義	三浦　良雄
	下森寿美子	舛成　米子	河野　武男	長嶺三千子	三浦　久男
	羽山　　尋	河野　福江	三浦　洋子	三浦千鶴子	三浦　禮駒
	河野八重子	三浦　芳枝	三浦トヨ子	三宅　弘子	三浦源太郎
	三浦リヨ子	米本　　潔	岡　　伯明	兼子　和恵	中島　由紀
	安村　浩美	津和野町土地改良区			

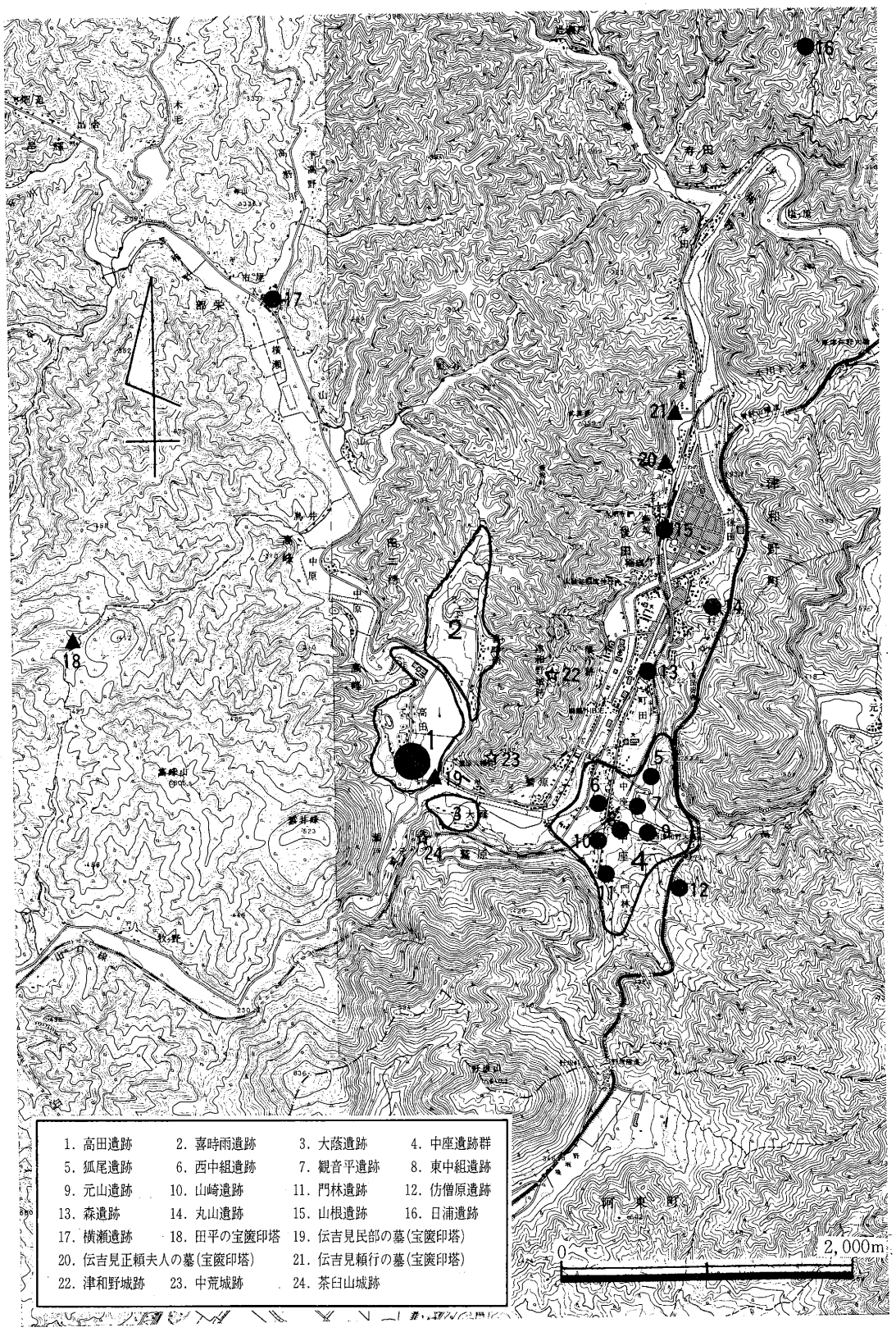
Ⅱ．調査地の位置と歴史的環境（第１図）

津和野町は、面積139.4k㎡、人口約7,000人を擁する山陰屈指の観光地である。島根県の西端部に位置し、鹿足郡に属する。県都松江市とは、直線で約160㎞の離隔があり、町域の西側では、山口県と県境を接している。町域を大きく蛇行する津和野川は、中国山地西部の山並みを刻んで流れ、隣接する日原町で高津川に合流し、益田市沖の日本海に注いでいる。白山火山帯の西端にあたる青野山火山群の造山活動は、当町の地勢形成に大きく関与しており、当地方の生活適地を決定付けるものとなった。標高908mの青野山を見上げる、狭長な小盆地状の谷あいが、今日にいたるまで町の中心として機能してきた。

古くは石見国鹿足郡能濃郷と称し、弘安５年（1282年）の吉見氏入部以来近世にいたるまで、城下町として津和野藩の政治的中枢を担ってきた。慶長５年（1600年）の関ヶ原の役後、坂崎出羽守の16年間の治領を経て、亀井氏によって幕末まで治められた。

調査地は、津和野町大字高峯、通称高田地区（第１図１）に所在する。津和野川とその支流名賀川によって挟まれた扇状地上に立地し、標高523mの雲井峯の山麓にあたる。坂崎氏以前の中世の段階では、津和野城の大手門は江戸期とは異なり、当時の城下は現在の町場とは城山を挟んだ反対側の喜時雨（第１図２）の地に営まれていたとされている。高田地区は、この喜時雨地区の津和野川を挟んだ対岸にあたり、中世には城下の一画をなしていた可能性がある。高田地区から津和野川を渡った南東部には、応永12年（1405年）遷座と伝えられる鷲原八幡宮が所在し、その裏山山頂には、津和野城の出城である中荒城（第１図23）が築かれている。高田地区の南方約500mの丘陵上にも、出城である茶臼山城（第１図24）が築城されており、また約100m南の地点には、吉見民部の墓と伝わる宝篋印塔（第１図19）が存在するように、高田地区の周辺には中世の名残が散見する。平成２年度に実施された発掘調査では、縄文時代～平安時代と、16世紀代の遺構・遺物が検出され、往時を検証する資料を得ている。従来高田地区には、弥生時代～古代にかけての遺物散布地として天皇原遺跡、鴻寄遺跡の２遺跡が局所的に把握されてきたが、一連の遺跡としてこれらを高田遺跡と総称することが妥当と思われる。今回の分布調査は、前記発掘調査地に隣接する地区で、従来遺物散布の確認されていない地帯である。

調査地の名賀川を渡った南側に、大蔭遺跡が所在する。縄文時代後期後半の西平式土器が多数採取されており、また多量の石製品が出土していることから、当該期の一大集落跡と推定される。高田遺跡においても、当該期の縄文土器が出土しており、距離的にみて、両遺跡の関連が想起される。そのほか、高田地区の東方約1.5㎞の扇状地上には、中座遺跡群（第１図４）が展開し、縄文時代～近世にいたる遺物の散布地として知られている。



第1図 高田遺跡周辺遺跡分布図

Ⅲ．発掘調査の概要

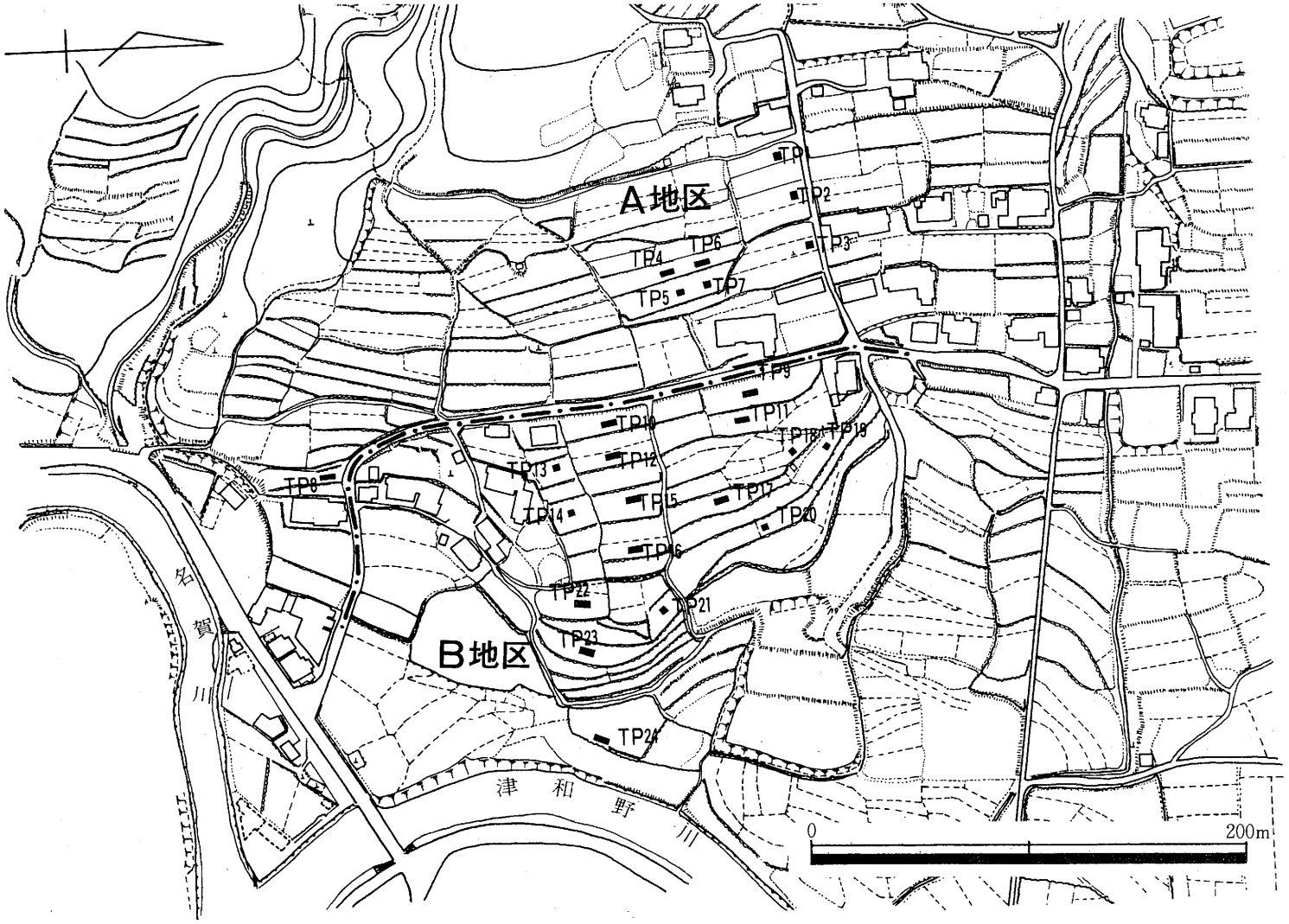
1．調査の方法と経過（第２図）

発掘調査は、前述のとおり今後予定される開発計画の調整資料を得るための試掘調査という基本的な性格のため、遺構の存在確認と遺物の包蔵範囲の把握を主眼として行った。調査対象地は、同一扇状地上の水田地帯に立地するが、高田集落内を貫通する道路によって東西に二分される。以下、便宜上道路以西部分をＡ地区、以東部分をＢ地区と呼称することとする。

Ａ地区は、平成２年度に実施された圃場整備事業に伴う発掘調査事業の調査地の北側と東側に隣接している。縄文時代から近世にいたる複合遺跡がこの地区で確認されており、本調査地区内にさらに遺跡が広がることが予測された。当初、ＴＰ-1～6の６ヵ所にテストピットを設定した。Ａ地区の遺物包含層は、黒褐色土層を基本とする。当層上面での遺構検出が困難であり、遺物を残しながら地山面まで掘り下げた。この結果、ＴＰ-2、3から柱穴状の遺構を検出した。ＴＰ-5では、厚さ50㎝の包含層から多数の遺物が出土したが、遺構が確認できず、隣接するＴＰ-4に比して発掘深度が深いため、流れ込みによる遺物包含の可能性も考えられた。このため、急遽ＴＰ-4、5からそれぞれ北に10ｍの地点にＴＰ-6、7を設定し、さらなる遺構の有無の確認を図った。これにより、両テストピットから柱穴状遺構が確認された。

Ｂ地区は、扇状地の扇端部にあたる。ＴＰ-9～24までの16ヵ所にテストピットを設定した。この地区の水田は、以前に区画整理が行われており、部分的に地下の撹乱や客土が行われている。特に、ＴＰ-18、19、24では１ｍ以上の客土がなされており、はなはだしい湧水のため掘り下げを中止した。ＴＰ-9では、畦畔の付け換えによる遺物包含層の撹乱がみられた。ＴＰ-13、14では、旧来の地形が大幅に削平されている様子で、耕作土下、基盤土下はすぐに地山であり、遺物包含層の痕跡を確認していない。遺物包含層が旧状のまま遺存しているとみられたのは、ＴＰ-11、15～17、22、23であった。Ｂ地区の遺物包含層は、基本的に暗茶褐色土である。当層上面で精査を行ったが、遺構を確認できず、遺物を残しながら地山面まで掘り下げた。この結果、ＴＰ-16から柱穴状の遺構を検出した。ＴＰ-15では、土層断面のセクションによって柱穴状の遺構を確認した。

Ａ、Ｂ両地区を通じ、各テストピットごとに遺物出土状況の写真撮影を行った後、層位ごとに遺物を取り上げた。また、土層断面セクションの写真撮影、実測を行い、遺構を確認したテストピットについては、平面図を作成した。調査後は、すべてのテストピットについて埋め戻しを行った。現地調査は、平成３年１月から実施し、同年２月に終了した。



第2図 高田遺跡分布調査テストピット配置図

2. 調査の概要

(1) A地区の概要

平成2年度に実施された発掘調査地に隣接する地区で、高田集落を貫通する道路の西側にあたる。TP-1～7は発掘調査された範囲の北側にあたる水田部に、TP-8は東側の畑地にそれぞれ設定した。TP-1～8を設定した耕地は全て、以前に区画整理が行われているらしく、各テストピットから旧耕土層と旧基盤土層を確認した。TP-1、3では客土がなされており、旧状の地形がかなり変更されているものと思われた。当地区は、扇状地の扇央部に立地しており、ほぼ全域にわたって火山灰土と思われる黒色系統の堆積土が広がっている。TP-1～7では、黒茶褐色土層を遺物包含層とし、TP-3、5、7ではその下層に黒褐色土の無遺物層が存在する。地山層は暗茶褐色ローム層であり、この層まで掘りこまれていない遺構の検出は困難であった。TP-2、3、6、7で遺構を検出しているが、その他のテストピットについても、遺構が存在した可能性がある。TP-8は、急斜面上を開墾した狭小な畑地に設定したもので、西側にそびえる石垣上の田地との比高差は約2mを測り、東側低位の宅地との比高差は約3mを測る。旧地形を大幅に改変しており、遺構面は削平され遺存していなかった。

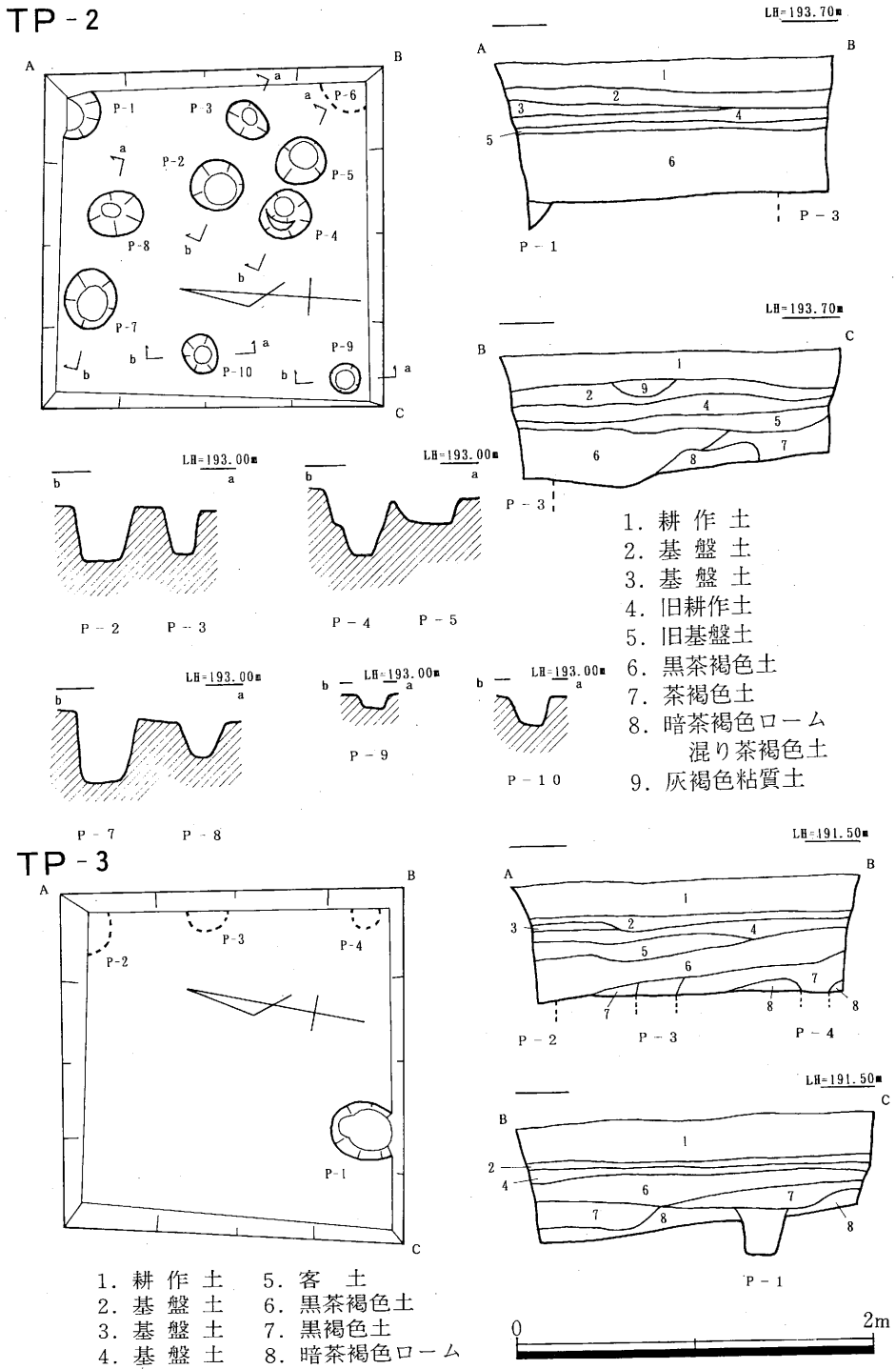
TP-1

標高195.3mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字家の前である。今回調査範囲の最西端にあたる。テストピットほぼ中央に南北方向に走る段差があり、東側が低くなる。区画整理以前の旧畦畔の痕跡と思われる。このため、東側は大幅な撹乱を受けており、西側に地表下約25cmで黒茶褐色土の遺物包含層が約15cmの厚さで遺存していた。包含層からは、古墳時代と中世の土師器が出土したが、遺構はみられなかった。撹乱層中からは、近世の陶器、釘、鉄製品が出土している。

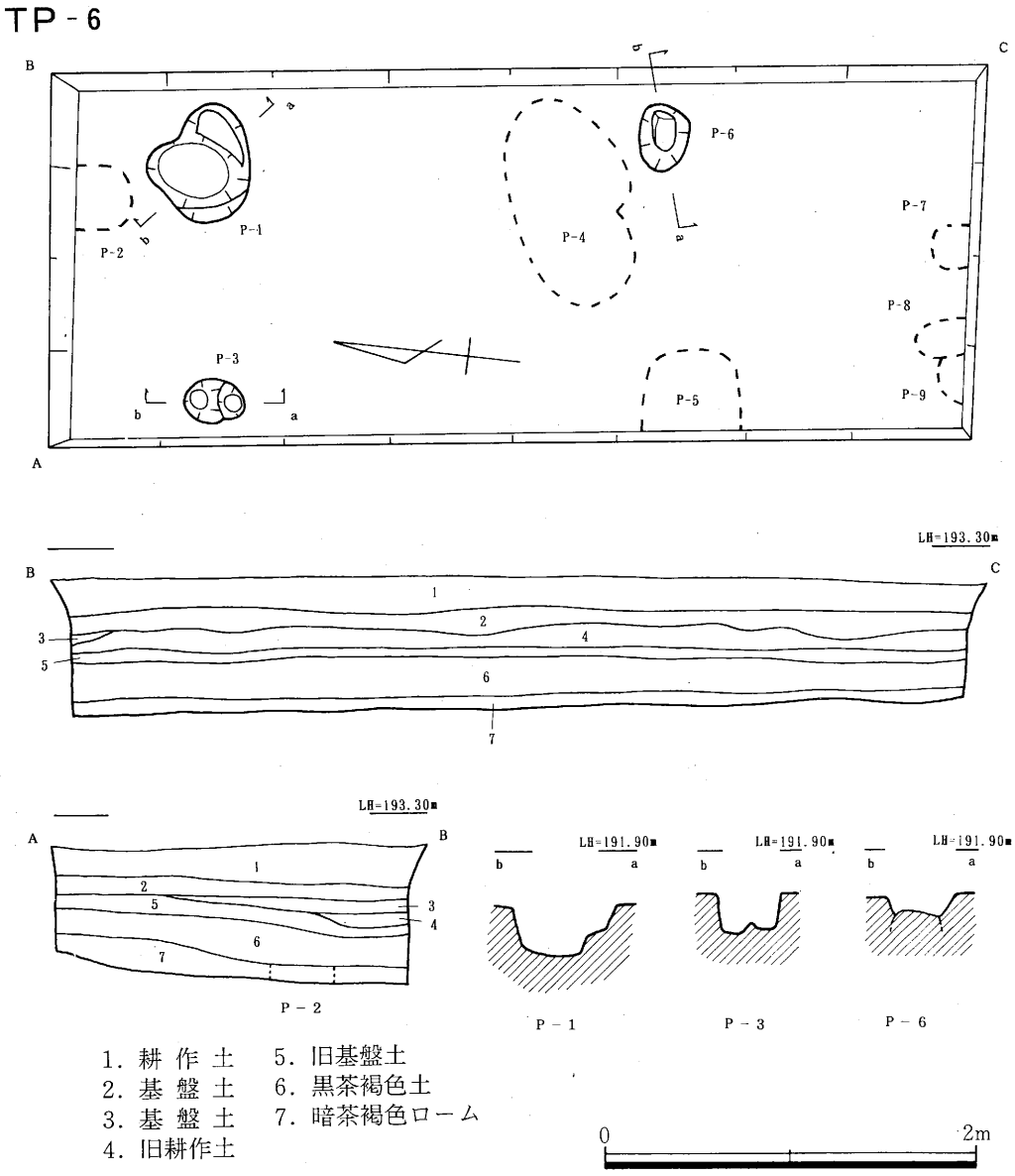
TP-2（第3、12図、図版1）

標高193.5mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字土井ノ内で、TP-1から東へ約15mの地点である。旧水田開墾の際、西側を削平したようすで、遺物包含層である黒茶褐色土層（第6層）は東側にのみ遺存していた。旧地形は緩斜面であったもようである。地表下約40cmで包含層となり、約40cmの厚さで堆積している。地山面で柱穴状の遺構10基を検出した。うちP-7から土師器片が出土した。包含層中からは、縄文土器、弥生時代後期の土器（第12図39）、土師器（第12図47）、瓦質土器（第12図54）、鉄製品が出土している。特に、古墳時代のものと思われる土師器が数量的に最も多く、当テストピット出土遺物中の半数を占める。

TP-3（第3図、図版2）

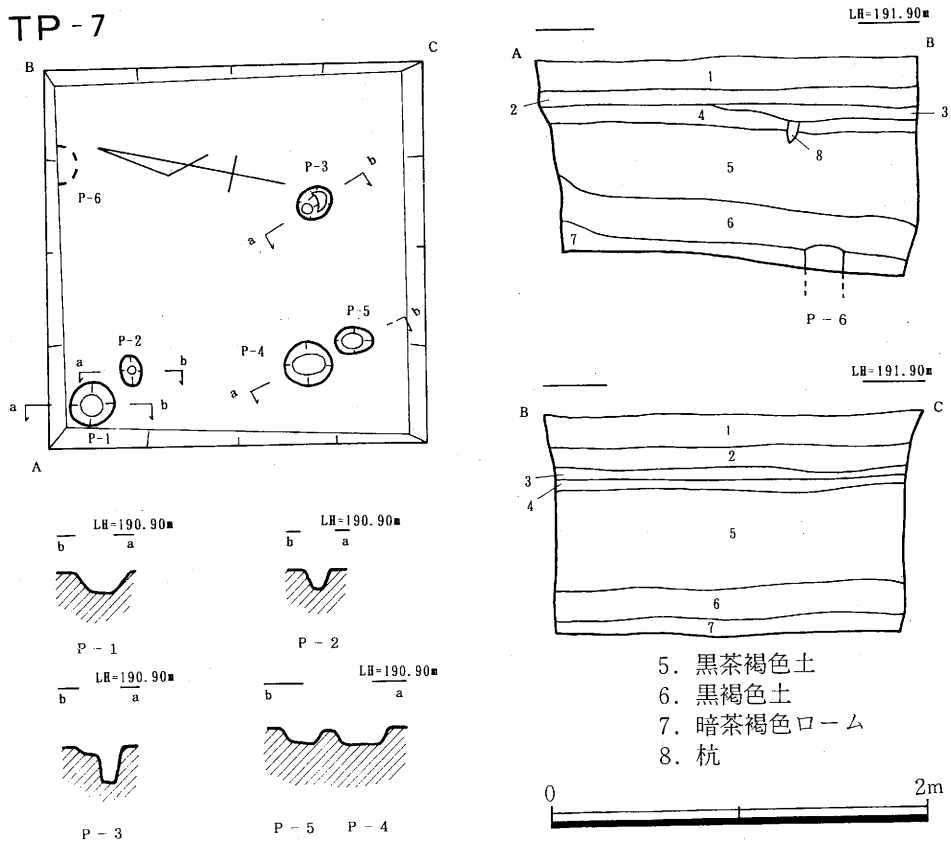


第3図 テストピット実測図(TP2・3)



第4図 テストピット実測図(TP6)

標高191.3mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字土井ノ内で、ＴＰ-2から東へ約20mの地点である。旧基盤土下、北側に客土層があり、旧地形は南から北へ下がる緩斜面であったもようである。地表下約30cmで黒茶褐色土の遺物包含層（第６層）となり、約15cmの厚さの堆積がみられる。柱穴状の遺構４基を検出したが、伴出遺物は無く、時期は不明である。包含層中からは、土師器と陶器の小片若干と、釘、銅銭（寛永通寶）が



第5図 テストピット実測図(TP7)

出土している。なお、このテストピットの南方約7mの地点の畦畔上に、五輪塔の空輪と風輪（図版２）が置かれている。本来は田地のほぼ中央付近に置かれていたらしいが、耕作のため移動してあるものという。

ＴＰ-4（第12図）

標高193.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字土井ノ内で、ＴＰ-3から南へ約60mの地点である。地表下約40cmで厚さ約10cmの、遺物包含層である黒茶褐色土層にあたる。当層中から、弥生土器（第12図45）、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁が出土している。地山面は、テストピットの東西の両端で10cmほど東側が低くなっており、南北両端ではあまり比高差がなかった。旧地形は、平坦面が東に向かって緩やかに傾斜していたものと推定される。遺構は、検出されなかった。

ＴＰ-5（第12、13図）

標高191.8mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字土井ノ内で、ＴＰ-4から東へ約10mの地点である。地表下約35cmで、遺物包含層である黒茶褐色土層にあたる。層の厚さは、テストピットの西端で33cm、東端で60cmを測り、下層上面がほぼ中央付近で東方向に下りはじめる。包含層中からは、弥生時代後期の土器（第12図46）、土師器（第12図55）、須恵器、瓦質土器、石斧（第13図58、59）が出土している。出土土器中、古墳時代の土師器が大半を占める。遺構は、検出されなかった。

ＴＰ-6（第4、12図、図版２）

ＴＰ-4と同じ、標高193.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字土井ノ内で、ＴＰ-4から北へ約10mの地点である。地表下約45cmで、遺物包含層である黒茶褐色土層にあたる。約20cmで下層の地山面にあたり、その上面はテストピットの西端から東端に向かって緩やかに傾斜している。南北両端の比高差はほとんどなく、旧地形はＴＰ-4にほぼ準じるものと思われる。地山面で、柱穴状の遺構7基、土坑状の遺構3基を検出した。Ｐ-1からは土師器の小片が出土した。Ｐ-4は、検出面で土坑状を呈し、長径105cm、短径60cmを測る。Ｐ-2、5も検出面は土坑状であるが、壁面にかかっている。包含層中から、土師器（第12図40）、須恵器（第12図50、51）、瓦質土器、磁器（第12図57）が出土している。出土土器中、約３割を古墳時代の土師器が占め、約４割を中世の土師器、陶磁器が占めている。

ＴＰ-7（第5、12図、図版２）

ＴＰ-5と同じ、標高191.8mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字土井ノ内で、ＴＰ-5から北へ約10mの地点である。地表下約40cmで、遺物包含層である黒茶褐色土層にあたる。約50cmで下層となるが、その上面は西から東に向かって緩やかな傾斜面をなしている。地山面で柱穴状の遺構6基を検出したが、伴出遺物はみられなかった。包含層中からは、縄文土器、弥生土器（第12図44）、土師器（第12図41、42）、須恵器（第12図49）、瓦質土器、青磁、白磁、陶磁器、鉄片が出土している。特に、古墳時代の土師器の出土量が多く、出土土器中の約７割を占める。今回調査を行った全テストピット中においても、最多の出土量であった。

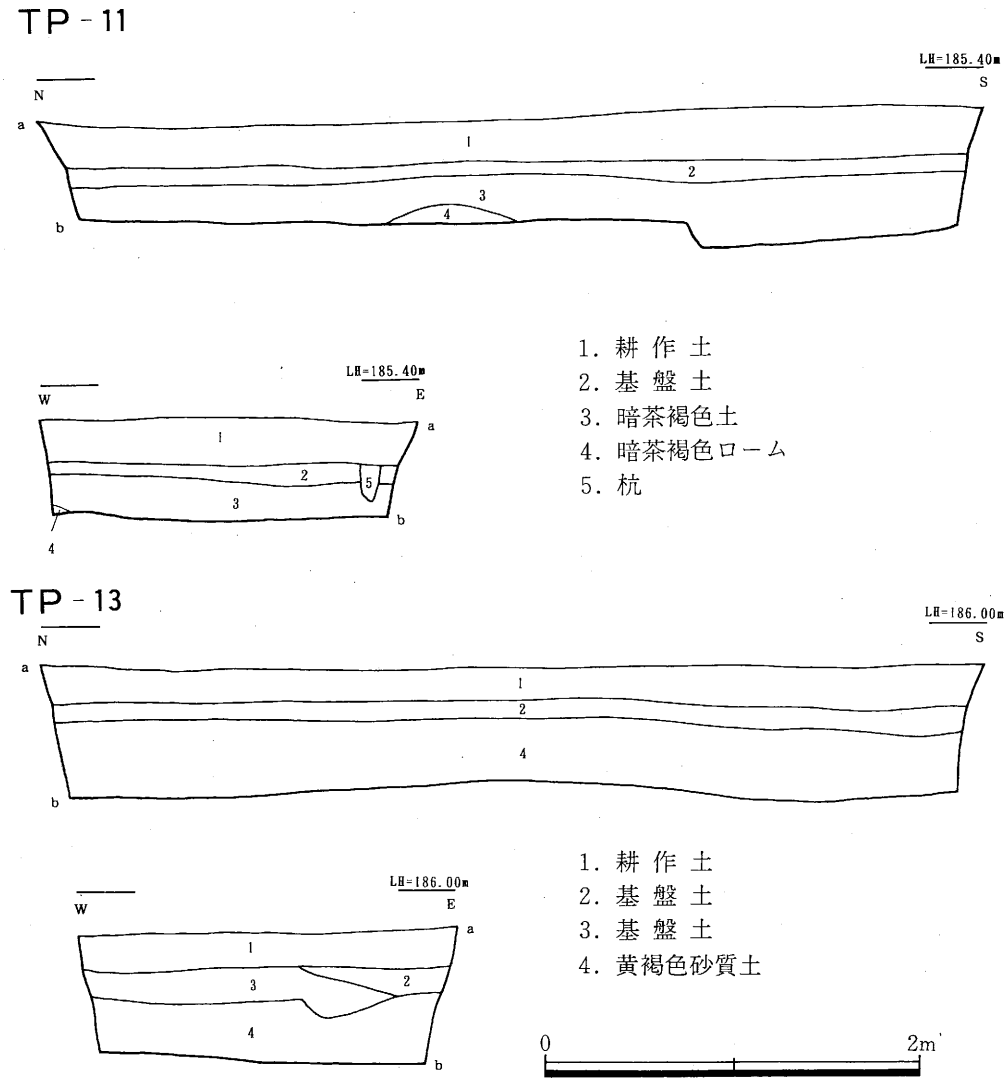
ＴＰ-8

標高181mの畑地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字田淵で、ＴＰ-1～7の南方約170mの地点である。遺物包含層は遺存せず、地山面は西から東へ傾斜し、かつ北から南へ段差をもって低くなる。よって北端では地表下約35cm、南端では約80cmで地山面に達する。また西端では地表下約30cm、東端では1mで地山面となる。扇状地の側縁部に立地することと一致する状況である。本来は、遺物を包含する流入土が存在したものと思われる

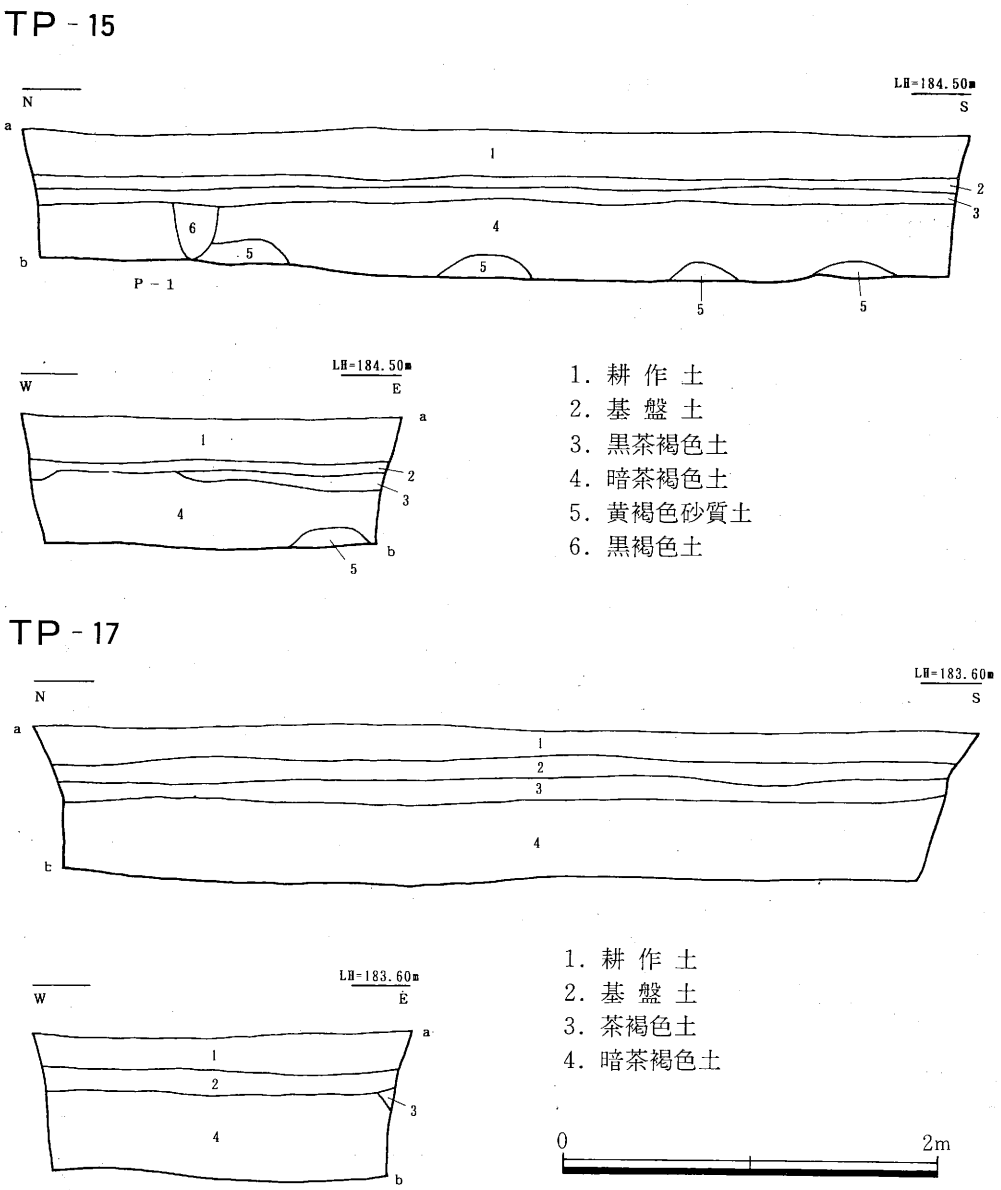
が、前述したように、急斜面を耕地化したため、大幅な地形の削平がなされたものと推察される。旧耕土層中からは、中、近世の陶磁器類が多数出土している。遺構は、検出していない。

(2) B地区の概要

道路の東側にあたる、扇状地の扇端部分である。現況では、道路付近からTP-16付近までの約65mの間で、比高差約3.6mであるのに対し、TP-16付近からTP-24付近までの約85mの間で比高差8.9mと急斜面になる。特にTP-23付近では、狭長な田地が造成されている。前述したように、TP-24では1m以上の客土がなされており、湧水も活発であった。以前区画整理が行われた際、地下5mまで砂礫層が続いたという。A地区のTP-8からTP-20あた



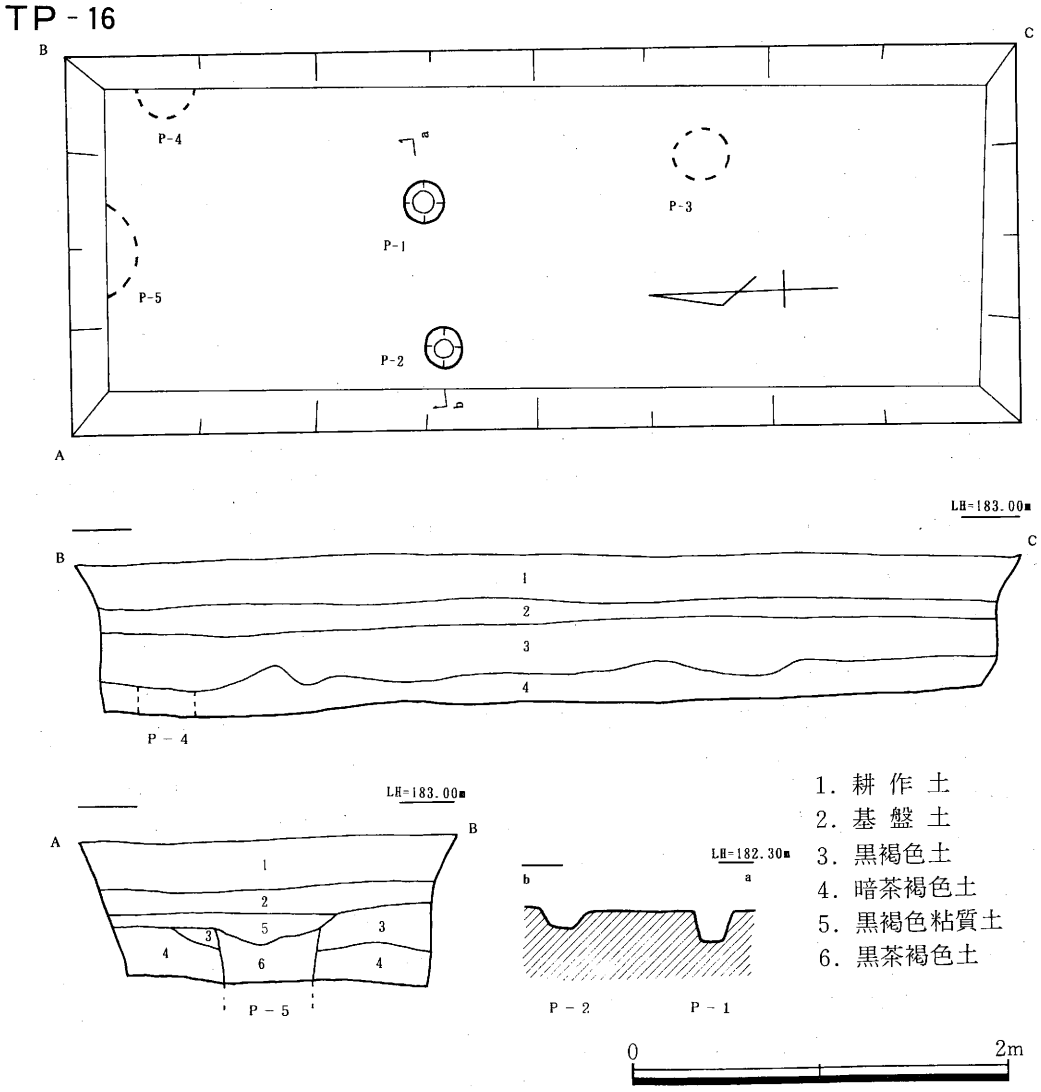
第6図 テストピット実測図(TP11・13)



第7図 テストピット実測図(TP15・17)

りにかけて、標高178mの等高線が弧状に走っており、B地区の南端が名賀川の旧河道の移動幅の端部にあたるものと推定される。その場合、TP-16で確認された遺構の検出面と河面との比高差は4m以上であったものと推定される。

TP-9～24は、扇状地扇端部の傾斜面をほぼ網羅するように配置した。特に、比較的傾斜の緩やかな標高184～187mの範囲では、TP-9～15の7カ所のテストピットを設定し、重点的に調査を行った。区画整理による撹乱、地形の変更が認められたのは、TP-9、10、12～



第8図 テストピット実測図(TP16)

14、18～21、24である。プライマリーな遺物包含層の遺存を確認したのは、TP-9、15～17、22、23である。B地区の遺物包含層はA地区とは異なり、暗茶褐色土層である。TP-10、15では、A地区の遺物包含層である黒茶褐色土層を確認したが、部分的で厚さの薄いものであった。地山層は、暗茶褐色ローム層か、その下層の黄褐色砂質土層である。遺構は、TP-16で柱穴状のピットを地山面において検出したほか、TP-15では断面セクションで柱穴状のピットを確認した。その他のテストピットについては、遺構を把握できなかった。

ＴＰ-9（第12図）

標高185.7mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字六瀬である。西側の約2分の1が区画整理によって撹乱されており、旧畦畔の痕跡である石列が確認された。東側も遺物包含層の削平を受けているものと思われたが、地表下約45cmで厚さ約10cmの暗茶褐色土層が確認された。当層中から土師器（第12図48）と銅滓と思われる小粒の金属塊が出土した。なお、旧耕作土層中から、今回調査を行ったテストピット中最多の須恵器が出土している。遺構は、検出されなかった。

ＴＰ-10

標高186.7mの田地に設定した、5×2のテストピットである。所在地は、字正毛で、ＴＰ-9の南方約65mの地点である。Ｂ地区において最も高位に位置する。地表下約30cmで地山層である暗茶褐色ローム層にある。東側の約4分の3の範囲に黒茶褐色土層の堆積が認められたが、遺物の包含はみられなかった。区画整理によってかなりの削平がなされているものと思われ、道路を挟んだ田地との比高差は約2mである。遺構は、検出されなかった。

ＴＰ-11（第6図）

標高185.2mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字千代留で、ＴＰ-9から東へ約12mの地点である。地表下約40cmで遺物包含層である暗茶褐色土層にあたる。当層中には、かなりの密度で有機質分が含まれていた。包含層中から、土師器、須恵器、瓦質土器、釘、石鏃が出土している。特に、古墳時代の土師器の出土量はＴＰ-7に次いで多く、須恵器はＴＰ-9に次ぎ、中世の土師器は最多の出土量であった。遺構は確認していない。

ＴＰ-12（第6、12、13図）

標高185.8mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字正毛で、ＴＰ-10から東へ約15mの地点である。地表下約35cmで地山層である暗茶褐色ローム層にあたる。遺構は検出されなかった。なお、基盤土層中から、縄文土器、石斧（第13図60）のほか、弥生時代前期と思われる土器（第12図43）、瓦質土器（第12図53）が出土している。

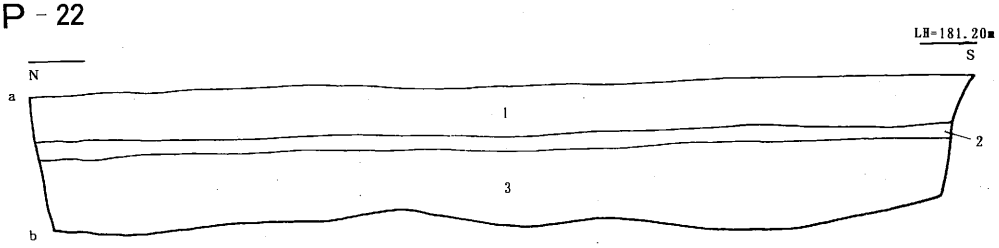
ＴＰ-13

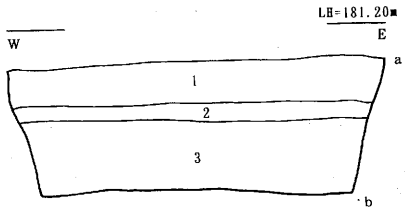
標高185.6mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字的場道上で、ＴＰ-12から南へ約25mの地点である。地表下約50cmで地山層である黄褐色砂質土層にあたる。甚だしい旧地形の削平が行われたものと思われる。遺構は検出されなかった。

ＴＰ-14

標高184.1mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字的場道上で、ＴＰ-13から東へ約22mの地点である。地表下約35cmで地山層である黄褐色砂質土層にあた

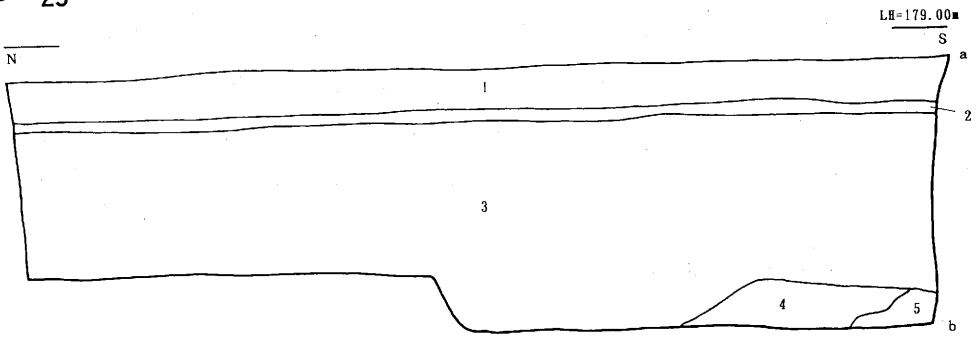
TP－22

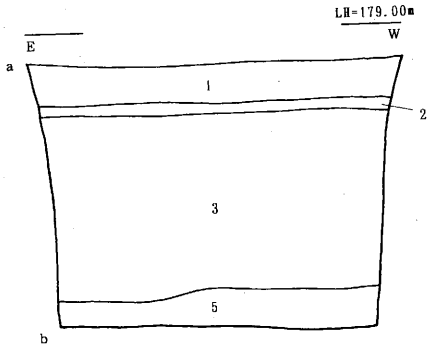




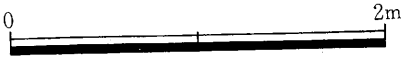
1. 耕 作 土
2. 基 盤 土
3. 暗茶褐色土

TP－23





1. 耕 作 土
2. 基 盤 土
3. 暗茶褐色土
4. 茶褐色土
5. 明茶褐色土



第9図 テストピット実測図(TP22･23)

る。ＴＰ-13と同様、かなり旧地形が削平されているものと思われる。遺構は検出されなかった。

ＴＰ-15（第7、11、12、13図）

標高184.3mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字的場で、ＴＰ-12から東へ約22mの地点である。東側の約2分の1の範囲に黒茶褐色土層が遺存しており、当層中から土師器、須恵器（第12図52）、瓦質土器が出土している。当層下端から4層に掘り込まれた柱穴状の遺構1基を確認した。地表下約40cmで遺物包含層である暗茶褐色土層にあたる。縄文土器（第11図22、31、37）、石斧（第13図61）が出土しているが、遺構は確認されなかった。

ＴＰ-16（第8、12図、図版３）

標高182.8mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字的場で、ＴＰ-15から東へ約23mの地点である。地表下約30cmで遺物包含層である暗茶褐色土層にあたる。包含層上層から中世の土師器、青磁（第12図56）が出土しているが、中世の土器の出土量としては、ＴＰ-11に次ぐものであった。その他当層中から縄文土器、石斧、磨石が出土している。包含層と基盤土層との間層に黒褐色粘質土層があり、包含層の撹乱層と思われる。土層断面によると、この層がＰ-5の上方を削平しており、Ｐ-5は本来包含層の上面から掘り込まれたものと思われる。包含層下端面からは、Ｐ-4が掘り込まれており、当テストピット検出の遺構は２時期にわたるものであることを確認した。このほか3基の柱穴状遺構を検出している。

ＴＰ-17（第7、10、11、13図、図版３）

標高183.3mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字正毛で、ＴＰ-15から東へ約40mの地点である。地表下約30cmで遺物包含層である暗茶褐色土層にあたる。当層中には、多量の有機質分が混入している。包含層中から、ＴＰ-23に次ぐ多量の縄文土器（第10図17、第11図24、33）と石斧（第13図62）が出土している。遺構は検出されなかった。

ＴＰ-18（第10、11図）

標高183.5mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字正毛で、ＴＰ-11から北東へ約25mの地点である。かなりの客土がなされており、おびただしい湧水に見舞われた。遺物包含層は確認できなかったが、客土中から縄文時代早期の条痕文土器（第10図9）及び後期の注口土器（第11図28）が出土した。遺構は確認していない。

ＴＰ-19

標高182.9mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字正毛で、ＴＰ-

18から北へ約15mの地点である。ＴＰ-18同様、かなりの客土がなされている。遺物包含層及び遺構の確認にいたっていないが、客土中から須恵器が出土している。

ＴＰ-20（第14図）

標高181.8mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字正毛で、ＴＰ-17から北東へ約25mの地点である。耕作土層下は客土層であり、地表下約40cmで地山層である黄褐色砂質土層にあたる。客土層中から、石錘（第14図63）、須恵器が出土しているが、遺構は検出していない。

ＴＰ-21

標高181.6mの田地に設定した、2×2mのテストピットである。所在地は、字的場道下で、ＴＰ-16から東へ約30mの地点である。耕作土層下は客土層であり、地表下約30cmで地山層である黄褐色砂質土層にあたる。遺構は検出されていない。

ＴＰ-22（第9、10図、図版３）

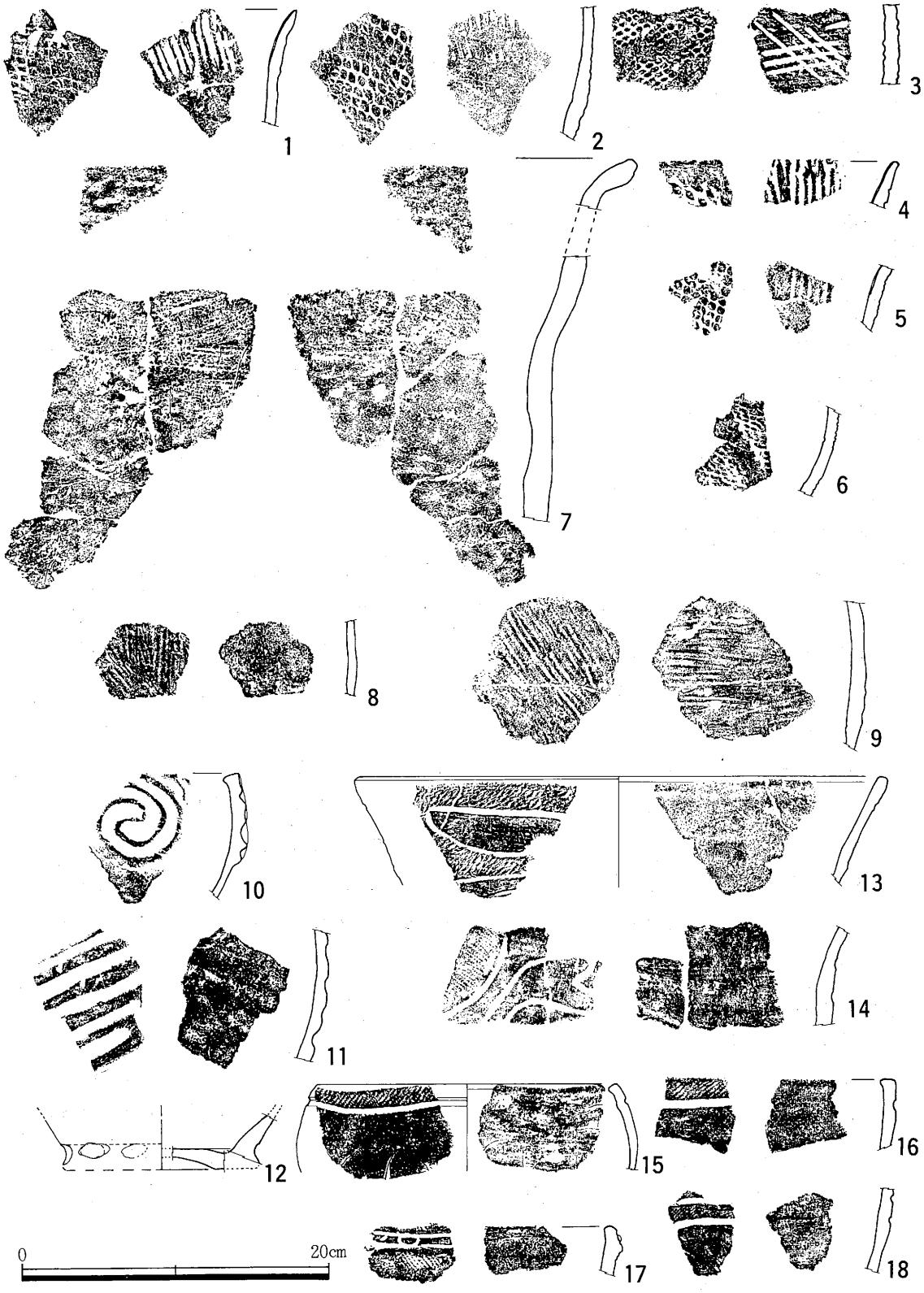
標高181mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字的場道下で、ＴＰ-21から南へ約35mの地点である。地表下約30cmで、遺物包含層である暗茶褐色土層にあたる。やや粘性があり、礫を多く含む層である。当層中から、縄文時代早期の無文土器（第10図7）が出土している。遺構は検出していない。

ＴＰ-23（第9、10、11、14図、図版３）

標高178.8mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字俵田で、ＴＰ-22から東へ20mの地点である。地表下約30cmで遺物包含層である暗茶褐色土層にあたる。包含層の厚さは1.2mに及び、当層中から縄文時代早期及び中期、後期の土器（第10、11図1～6、8、10～16、18～21、23、25～27、29、30、32、34～36、38）、石器（第14図64、65）が多量に出土した。今回調査したテストピット中、最多の遺物出土量である。各期の土器には、出土レベルの差が認められず、混在した出土状況であった。ＴＰ-23を設定した地点は、扇状地扇端部に位置する狭長な田地であり、本来かなりの傾斜面であった地形に即して、遺物が流れ込んだ状況と思われる。遺構は検出されなかった。

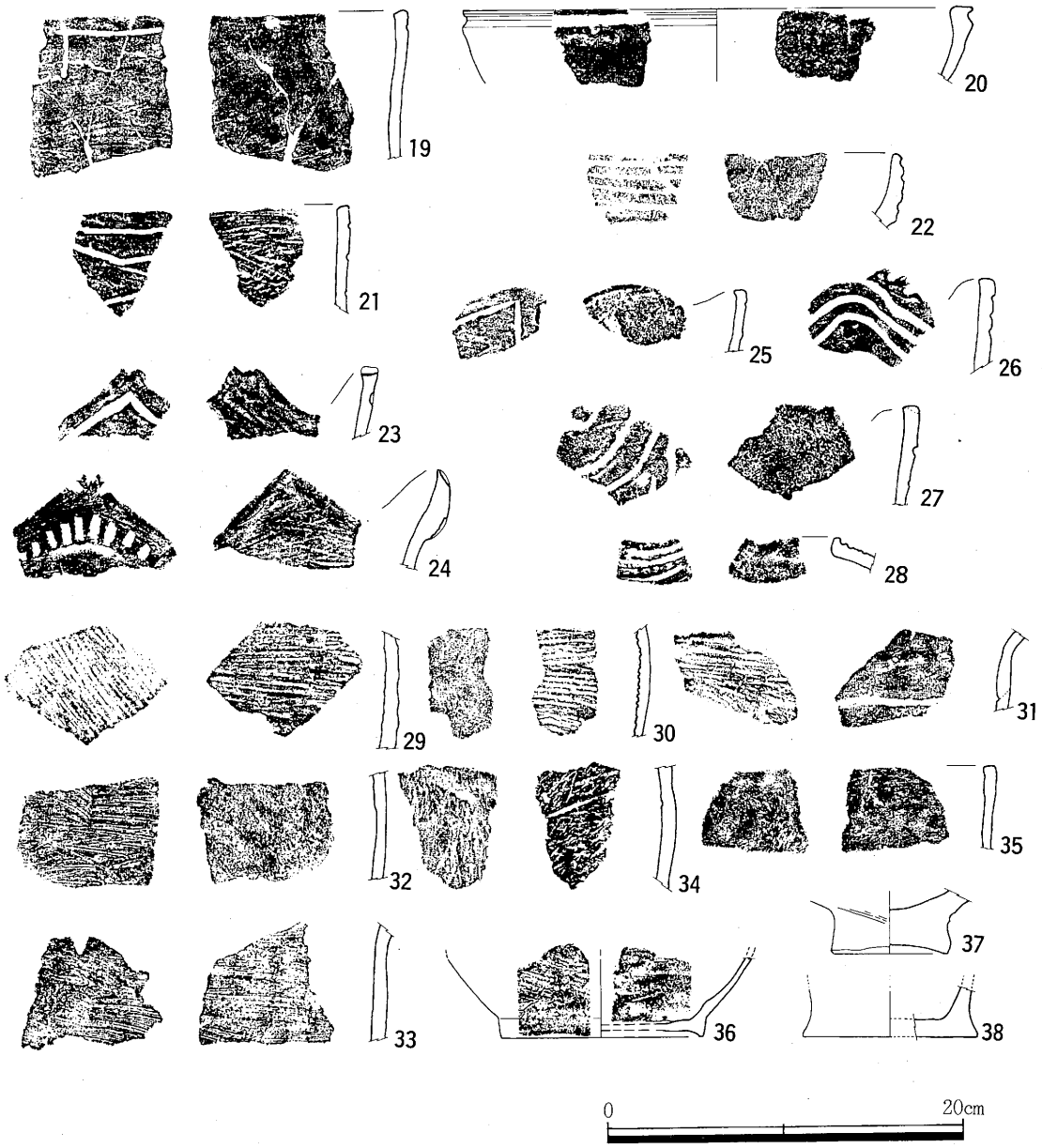
ＴＰ-24

標高173.8mの田地に設定した、5×2mのテストピットである。所在地は、字薮田で、ＴＰ-23から東へ約40mの地点である。かなりの客土がなされており、おびただしい湧水がみられた。遺物包含層及び遺構は、確認していない。

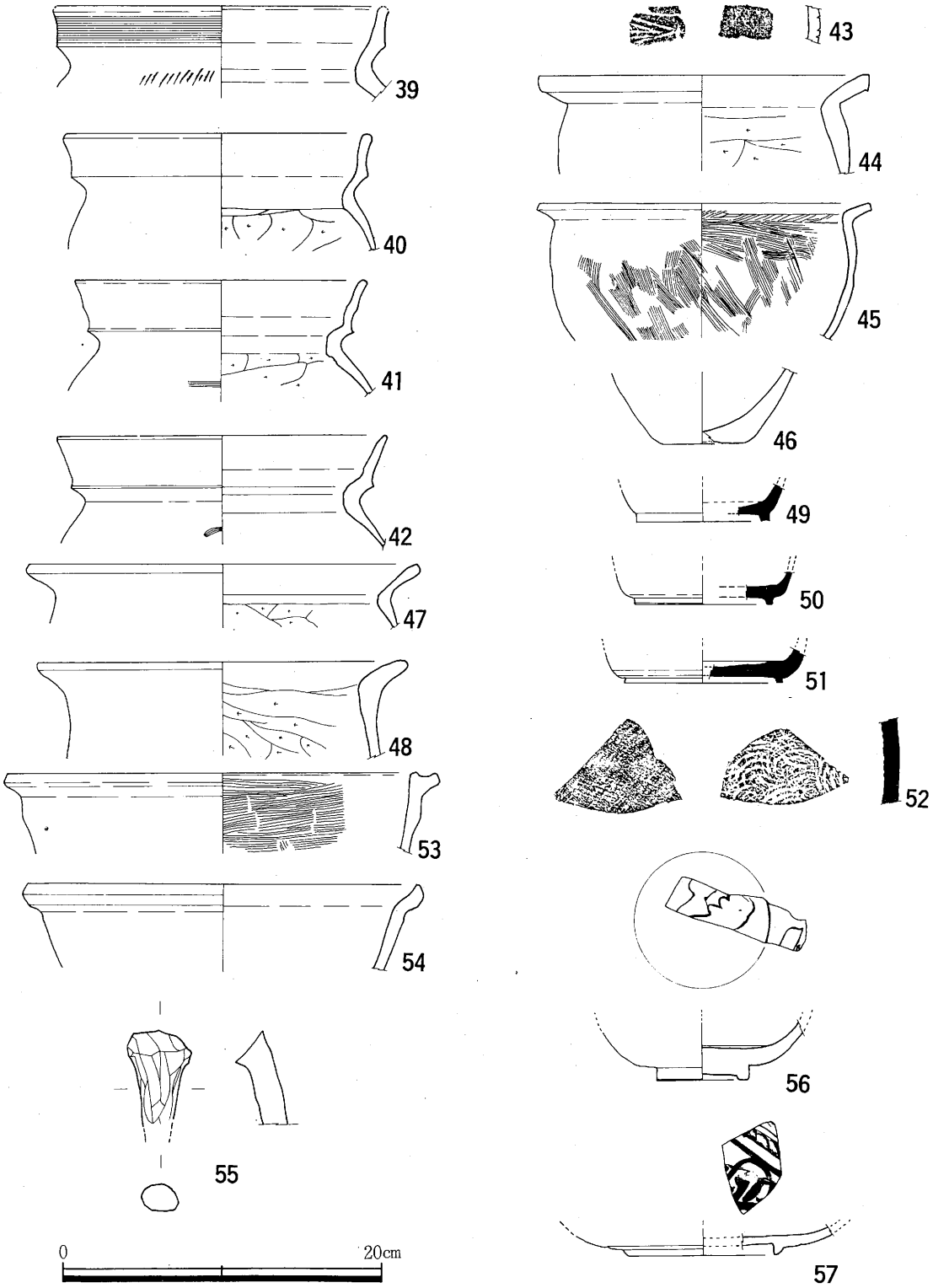


第10図 テストピット出土遺物実測図(TP17・18・22・23)

(1～6・8・10～16・18-TP23, 7-TP22, 9-TP18, 17-TP17)



第11図 テストピット出土遺物実測図(TP15・17・18・23)
(19～21・23・25～27・29・30・32・34～36・38-TP23, 22・31・37-TP15, 24・33-TP17, 28-TP18)



第12図 テストピット出土遺物実測図（TP2・4・5・6・7・9・12・15・16）

（39・47・54−TP2, 40・50・51・57−TP6, 41・42・44・49−TP7, 43・53−TP12,
45−TP4, 46・55−TP5, 48−TP9, 52−TP15, 56−TP16）

3. 出土遺物の概要（第10～14図、図版４～６）

今回の調査によって出土した遺物の約６割は土器類であり、その重量組成は、以下のとおりである。

土器類100％

縄文土器：早期－18％、中期－1％、後期－27％、時期不明－4％、弥生土器：1％、土師器：古墳時代前期－20％、古代－1％、中世－7％、時期不明－2％、須恵器：7％、瓦質土器：2％、青白磁：1％、近世陶磁器：4％、時期不明陶磁器：5％

また、遺物の約３割を占める石器類については、打製石斧6、磨製石斧7、磨石6、石鏃片2、石錘1、黒燿石片7、安山岩片55が出土しており、また金属製品として釘19、鉄斧1、鉄滓8、銅銭（寛永通寶）1、銅滓1が出土している。以下、図示した遺物について概述し、出土遺物の概要説明としたい。

縄文土器（早期）（第10図1～9、図版４）

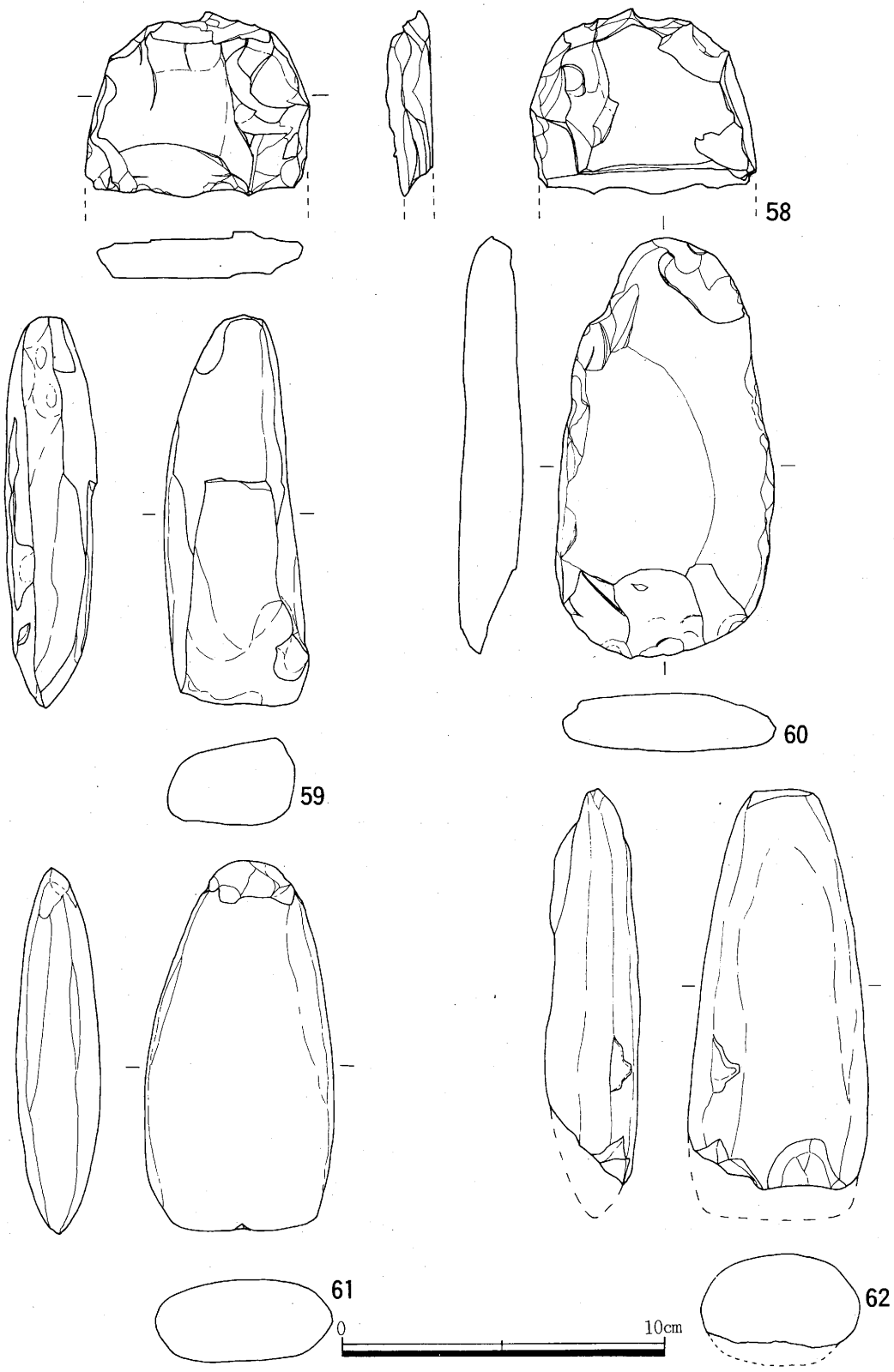
1～6は押型文土器である。1は格子目状の施文がみられ、口縁部内面に原体条痕が施されている。2～6は楕円押型文で、2、4、5には口縁部内面の原体条痕がみられる。3の内面は原体条痕と思われるが、縦位に施した後、斜行させている。6は、無施文部がみられる胴部下半部片である。内面に指押さえ痕がみられる。1～6はいずれも胎土中に繊維を多く含んでいる。7は厚手で、大型の器形を呈する無文土器である。外反した口縁部から屈曲して胴部に連なる器形である。胎土中に繊維を若干含む。8、9は条痕文土器である。8は外面に、9は内外面に条痕を施す。胎土中に繊維を若干含む。

縄文土器（中期）（第10図10～12、図版４）

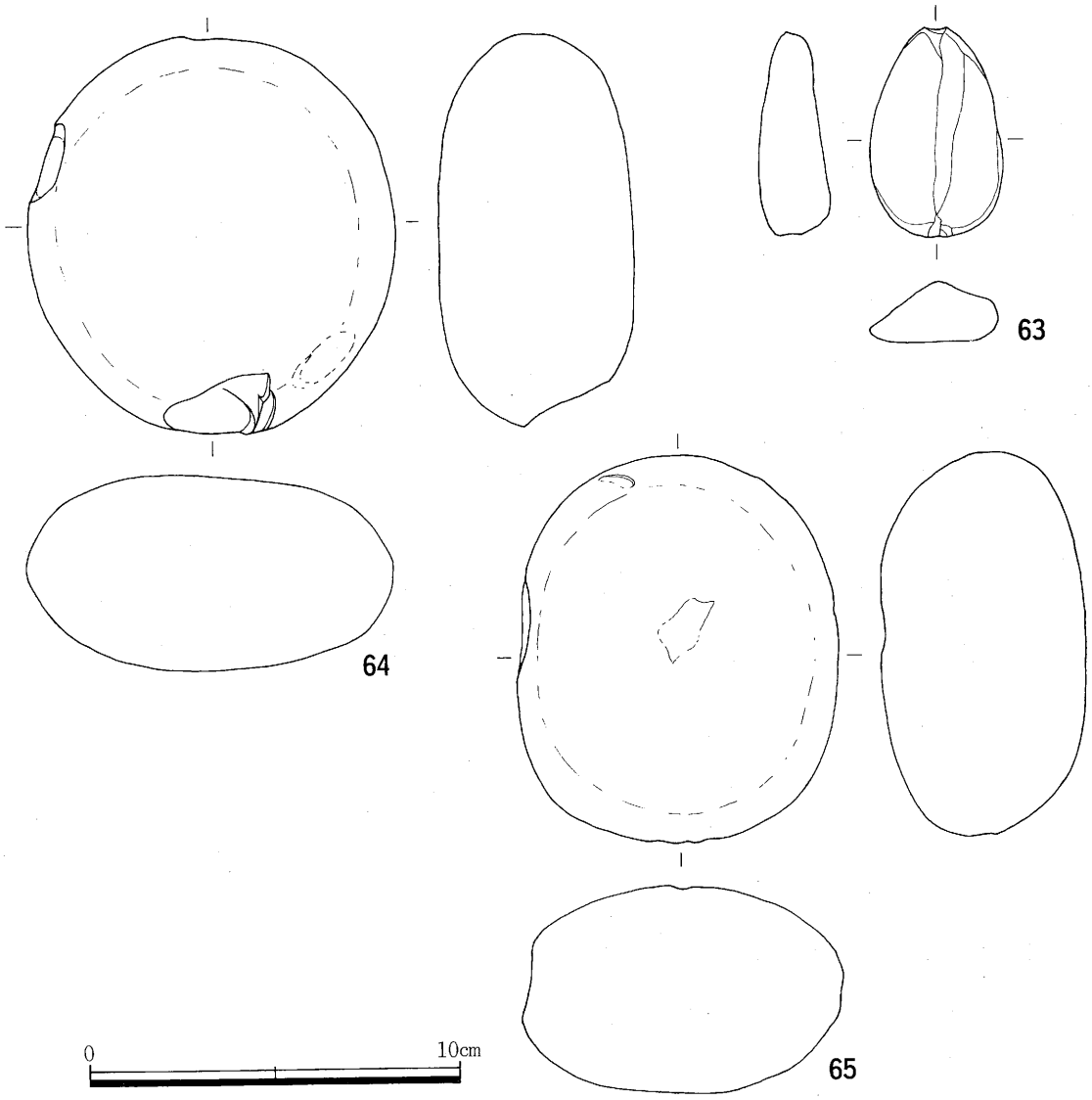
10は隆帯を貼付け、渦巻状の文様を施す。波状口縁である可能性がある。口縁端部は平坦面をなし、口唇部内側に隆帯を貼付けている。内面はヨコナデを施している。船元Ⅱ式Ｃ類に類例がみられ、中期に位置付けておく（註1）。11、12は、胎土中に滑石を混入する阿高式土器である。11は斜行する凹線を施す胴部片で、12は外面に指押さえのみられる底部片である。

縄文土器（後期）（第10図13～18、第11図19～38、図版５）

13は鉢形の磨消疑似縄文土器で、14は屈曲する胴部をもつ磨消縄文土器である。13、14、18は、いずれも曲線によって施文部を仕切っている。15、16は口縁部外面に沈線を施し、口縁端部との間に疑似縄文を施している。いずれも口唇部内側を肥厚させている。17は口縁部下に２条の沈線を施し、その間に竹管状の施文具によって刺突を加えている。沈線下には縄文を施している。19、21は外面に沈線文を施している。19の外面は条痕による調整、内面はミガキを施し、21の内面は粗い条痕を施している。20は口縁部に凹線を施し、端部を平坦にナデ仕上げしている。22は口縁部に４条の沈線を配し、内面をナデ調整している。



第13図 テストピット出土遺物実測図(TP5・12・15・17)
(58・59-TP5, 60-TP12, 61-TP15, 62-TP17)



第14図 テストピット出土遺物実測図（TP20・23）
（63-TP20, 64・65-TP23）

23～27は、波状口縁を呈する土器である。23、25～27は沈線による施文がみられ、23、24、26、27はいずれも口縁端部に刻みを施している。24は口縁部に厚みを持たせ、巻貝によって刻みと圧痕を施している。23と24の内面は条痕調整、25～27の内面はナデ調整を施している。28は沈線を施す注口土器の口縁部片である。

29～33は、条痕調整を施す土器である。29～31は2枚貝、32、33は巻貝によるものである。34は細い棒状工具によるミガキ状の調整がみられる。35は無文土器の口縁部片である。端部

第1表　高田地区分布調査 TP一覧表

地区	TP番号	字名	番地	調査規模（m×m＝㎡）	遺構	出土遺物（耕作土層、基盤土層、客土層中遺物も含む）
A地区	1	家ノ前	高峯449	2×2＝ 4		土師器、陶磁器、釘、鉄製品
	2	土井ノ内	〃 450	2×2＝ 4	ピット10	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、陶磁器、鉄製品
	3	土井ノ内	〃 465	2×2＝ 4	ピット4	土師器、陶磁器、釘、銅銭
	4	土井ノ内	〃 464	5×2＝10		土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶磁器、鉄製品
	5	土井ノ内	〃 464	2×2＝ 4		弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁 陶磁器 石斧
	6	土井ノ内	〃 464	5×2＝10	ピット10	土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、陶磁器
	7	土井ノ内	〃 464	2×2＝ 4	ピット6	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青白磁陶磁器
	8	田淵	〃 533-2	5×2＝10		土師器、須恵器、青磁、陶磁器、鉄製品
B地区	9	六瀬	〃 472-1	5×2＝10		土師器、須恵器、青磁、陶磁器、銅滓
	10	正毛	〃 471-1	5×2＝10		須恵器、陶磁器
	11	千代留	〃 473-1	5×2＝10		土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、石鏃、黒燿石片、釘
	12	正毛	〃 471-1	5×2＝10		縄文土器、弥生土器、土師器、青磁、陶磁器、石斧、瓦質土器
	13	的場道上	〃 491-1	2×2＝ 4		陶器
	14	的場道上	〃 491-2	2×2＝ 4		
	15	的場	〃 490-1	5×2＝10	ピット1	縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、石斧
	16	的場	〃 490-1	5×2＝10	ピット5	縄文土器、土師器、瓦質土器、青磁、陶磁器、石斧、磨石
	17	正毛	〃 476	5×2＝10		縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、青磁、黒燿石片、石斧
	18	正毛	〃 475	2×2＝ 4		縄文土器、須恵器、陶器
	19	正毛	〃 475	2×2＝ 4		土師器、須恵器、瓦質土器
	20	正毛	〃 476	2×2＝ 4		土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、石錘、黒燿石片
	21	的場道下	〃 487	2×2＝ 4		陶磁器
	22	的場道下	〃 489	5×2＝10		縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、黒燿石片
	23	俵田	〃 485	5×2＝10		縄文土器、石斧、磨石
	24	薮田	〃 483	5×2＝10		磁器

を平坦に仕上げている。36～38は底部である。36、37は上げ底、38は平底である。36は内外面を条痕調整し、37は上げ底を丁寧にナデている。

弥生土器（第12図39、43～46、図版６）

43はヘラによる羽状文状の施文がみられ、内面を丁寧にナデ仕上げしている。断片的な資料であるが、弥生時代前期の壷形土器の可能性を示唆しておく。39は複合口縁を呈する土器である。口縁部に平行沈線を配し、肩部に貝殻腹縁による圧痕を施している。44、45は素縁の口縁部を呈する土器である。45は内外面にハケ調整を施しており、鉢形の器形を呈する。46は平底の底部である。39、44～46は後期に比定される。

土師器（第12図40～42、47、48、55、図版６）

40～42、47は、古墳時代前期の土器である。40～42は複合口縁を呈し、47は素縁の口縁部を呈する。48は奈良～平安時代の甕である。55は、中世の足鍋の脚である。手づくねで、鍋の体部から剥離している。

須恵器（第12図49～52、図版６）

49～51は坏の底部、52は甕の胴部である。49～51には糸切り痕を観察できなかった。

瓦質土器（第12図53、54、図版６）

53は羽釜、54は鍋である。53の内面には、細かい横方向のハケが施されている。

磁器（第12図56、57、図版６）

56は青磁、57は伊万里焼の染付である。

石製品（第13、14図58～65、図版５）

58～62は石斧、63は石錘、64、65は磨石である。

（註１）山口大学 中村友博助教授のご教示による。

Ⅳ．小　　結

今回の分布調査によって、遺構の確認されたテストピットは６カ所であるが、時期を特定できる遺構が無いため、包含層から出土した遺物を通して、若干の検討を加えてみたい。

今回の調査では、合計24カ所のテストピットを設定したが、各々のテストピットによって遺物の出土相に差異がみられる。相対的な比較ではあるが、時代による遺跡の位置の変動が読み取れるものと思われる。

標高178～183m付近では、縄文土器及び石器類の出土が顕著で、特にＴＰ-17、23における

遺物の出土量は、全遺物出土量の約５割を占める。ＴＰ-23の出土遺物は流れ込みによるものと思われ、またＴＰ-16の包含層では、多量の有機質分が観察されていることから、縄文時代の遺跡の本体は、本来ＴＰ-15～17付近を中心とする範囲にあったものと推定される。したがってＴＰ-16で検出されたピットは、当該期に相当する可能性がある。

標高185～193m付近では、古墳時代前期～中世にかけての土器類が顕著に出土している。特に、ＴＰ-2～11にかけての範囲に多く、時代が下って遺跡地の高度が若干上がったことがみてとれよう。ＴＰ-2～7は、平成２年度の発掘調査地に隣接しており、遺跡地が南から北へさらに延長していることが推察される。ＴＰ-16は高度が下がって標高182mの地点にあたるが、中世の土器類の出土が顕著である。わずかながら他の中世土器類出土テストピットから離隔がみられる。ところで、この地点の字名を的場というが、現存する字名からそのまま歴史を云々することの危険はあるが、以前から、高田地区には中世の武士団村落にちなんだ字名の集中がみられるとの指摘がある（註１）。ＴＰ-1では家ノ前、ＴＰ-2～7では土井ノ内の字を持つ。このほかにも調査地の周辺に、家ノ通り、家ノセド、家ノ後、ウラ門、惣門、本門、本門口、本家、部ヤ、ヤシキなどの字名が集中しており、調査地の歴史的環境や平成２年度の発掘調査の結果を勘案しても、これら字名の歴史的資料としての価値を無視することはできないものと思われる。

今回顕著な出土量を示した縄文土器は、早期と後期の土器が主体である。早期の押型文土器は、口縁部内面に原体条痕を施すもので、楕円文は小ぶりで粗大なものはみられない。なお、第10図7の繊維を含む無文土器については、押型文土器と条痕文土器のいずれに伴うものかを層位的に検証することはできなかった。後期の土器は、磨消縄文（疑似縄文）（第10図13、14）や３本沈線による曲線的な施文（第11図26）、口縁部の帯状縄文施文（第10図15～18）などから、概ね中津式～彦崎ＫⅡ式の段階に属するものであろう。第11図24の貝殻圧痕を施す波状口縁土器は、類例の希少なものであるが、上記の時期の範疇に収められるものである（註２）。中期の土器も少量ながら出土している。第10図11、12は滑石を混入する、阿高式土器である。津和野町の近隣では、近年島根県匹見町で顕著に出土している（註３）。今回の調査で検出された縄文土器については、層位的な出土状況になかったが、高田遺跡は、石見地方西部の縄文土器の編年研究の上で重要な資料を包蔵する遺跡であることは確実である。

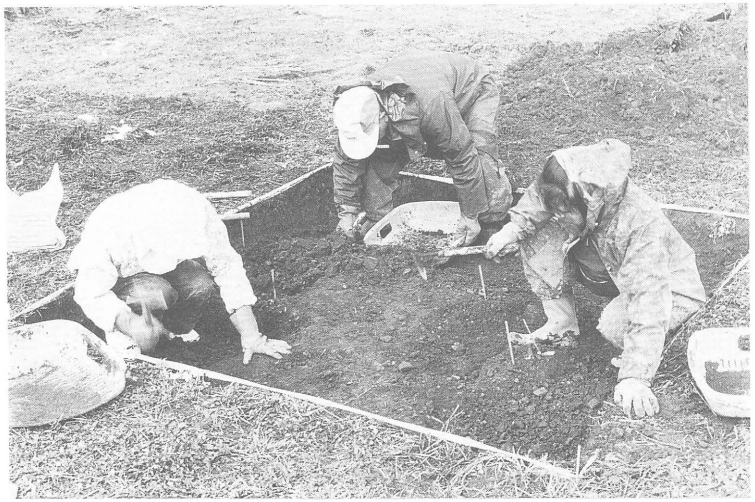
註１　「Ⅲ中世村落と荘園制の面影」『津和野町史第１巻』　1970年

註２　山口大学 中村友博助教授のご教示による。

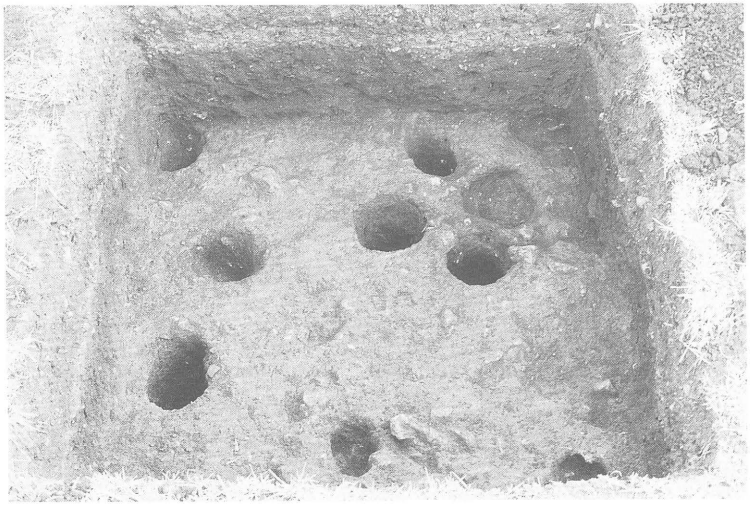
註３　『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会　1990年

1．A地区調査地遠景（西から）

2．B地区調査地遠景（南西から）

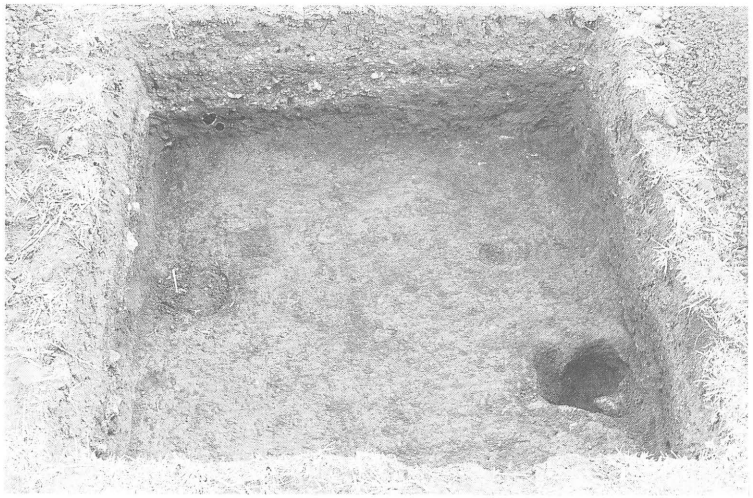


3．作業風景



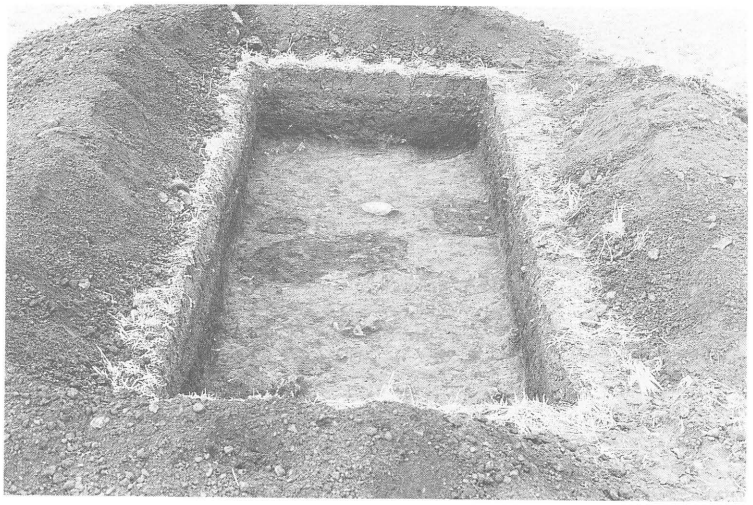
4．TP2完掘状況（西から）

図版 1



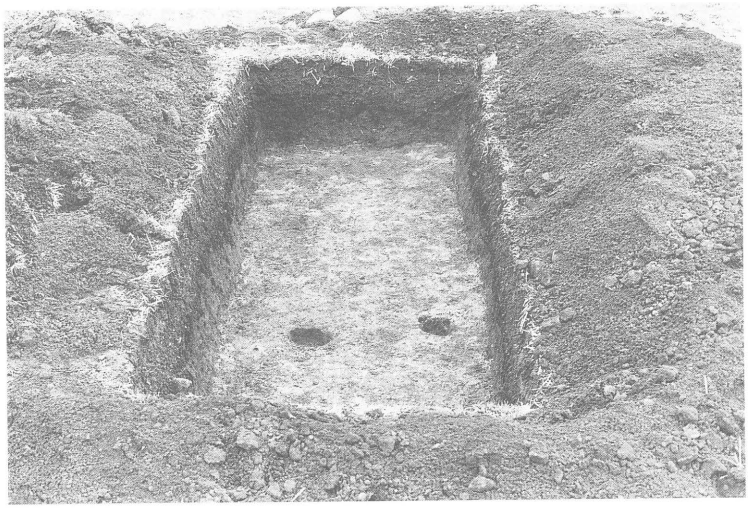
1．TP３検出状況（西から）

2．TP３付近所在五輪塔（東から）



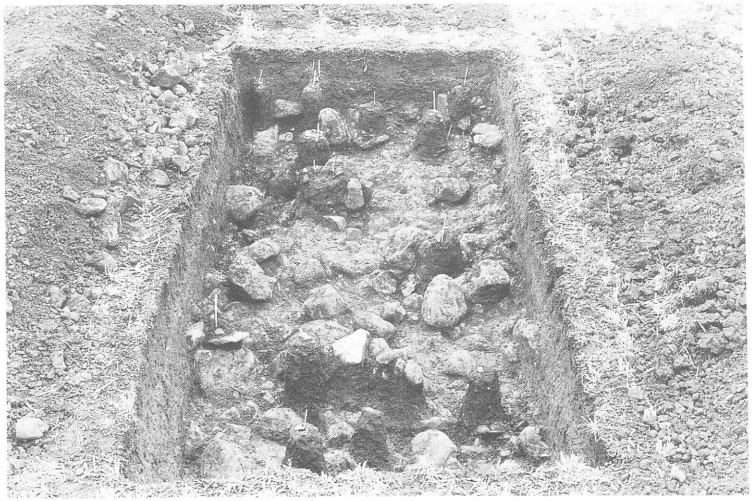
3．TP６検出状況（北から）

4．TP７検出状況（東から）

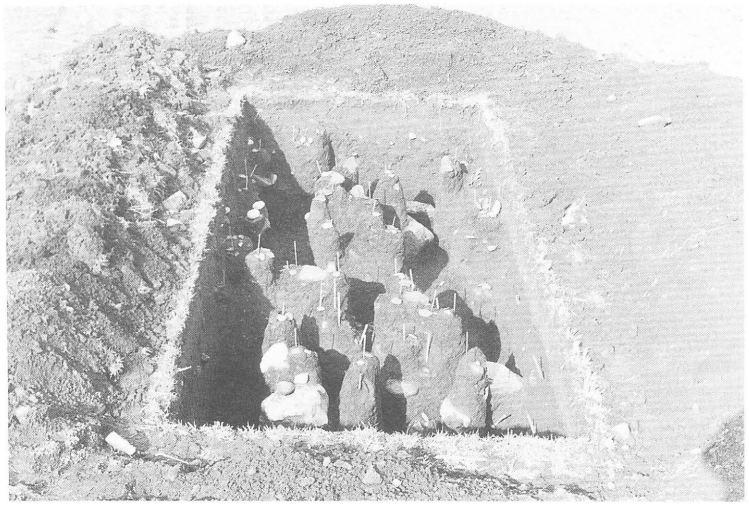


1．ＴＰ16検出状況（北から）

2．ＴＰ17遺物出土状況（南から）



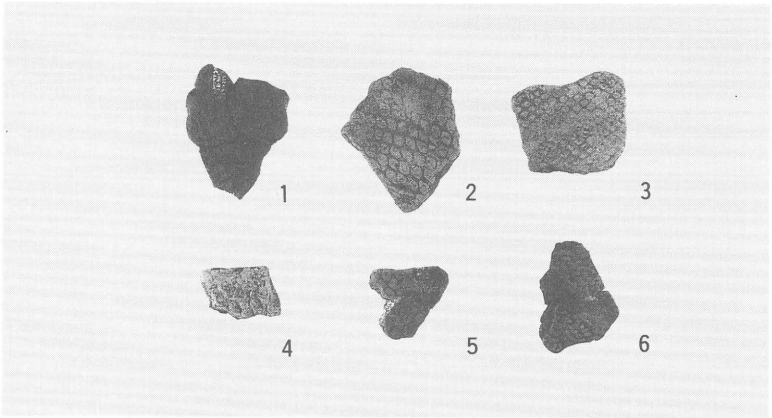
3．ＴＰ22遺物出土状況（北から）

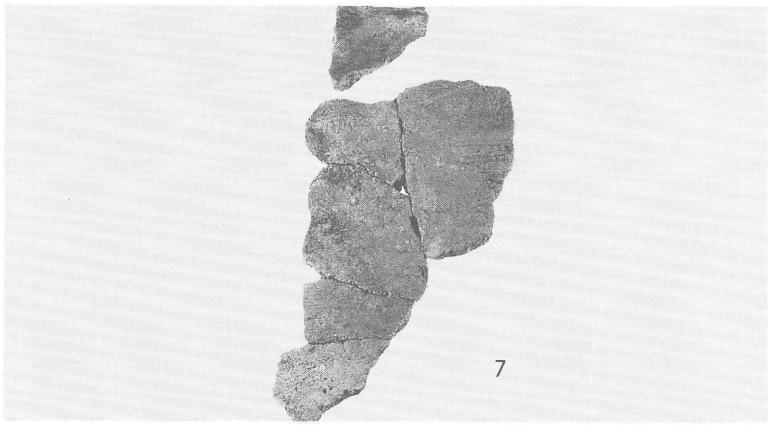


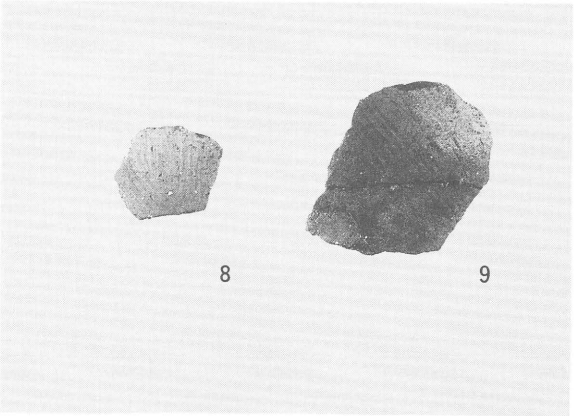
4．ＴＰ23遺物出土状況（南から）

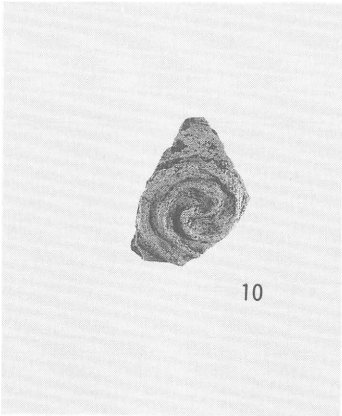
図版３

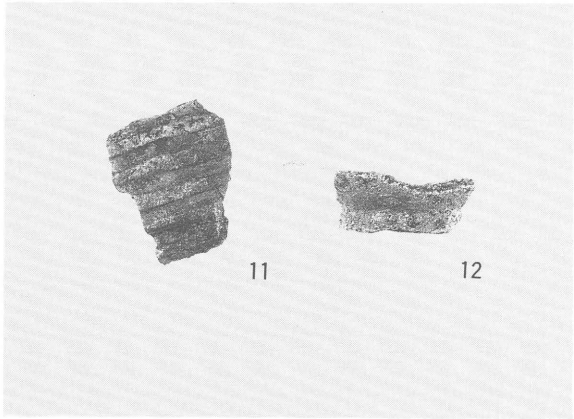
図版 4



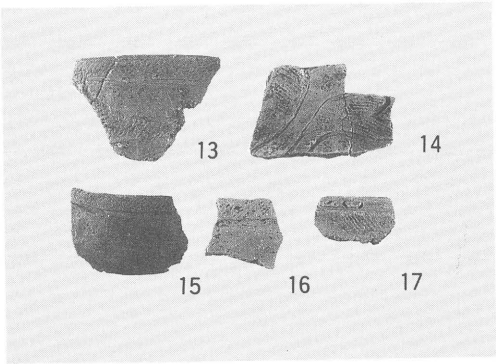


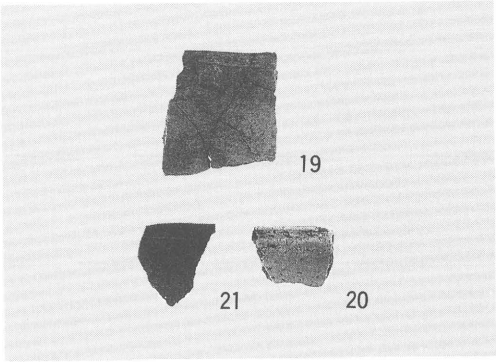


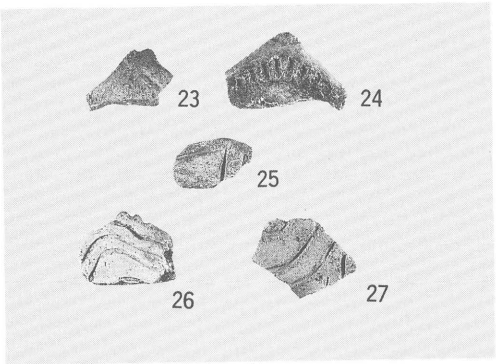


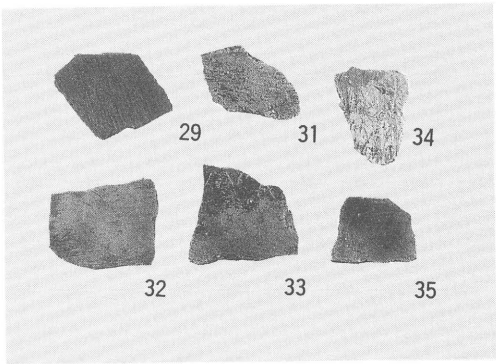


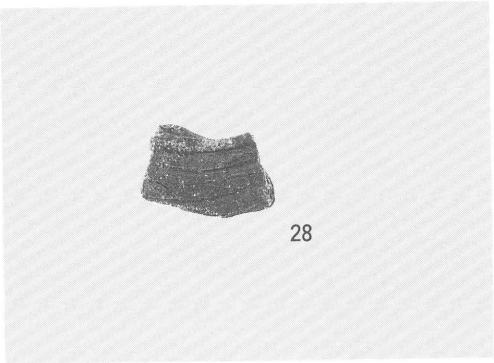
ＴＰ23出土縄文土器	ＴＰ22出土縄文土器	
ＴＰ18・23出土縄文土器	ＴＰ23出土縄文土器	ＴＰ23出土縄文土器

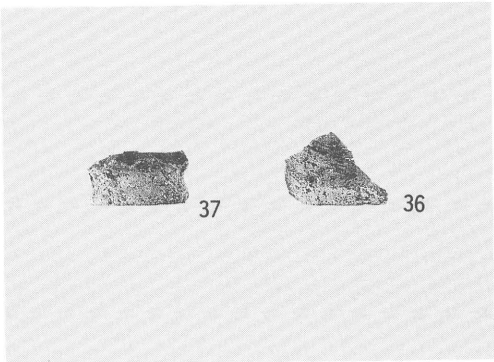


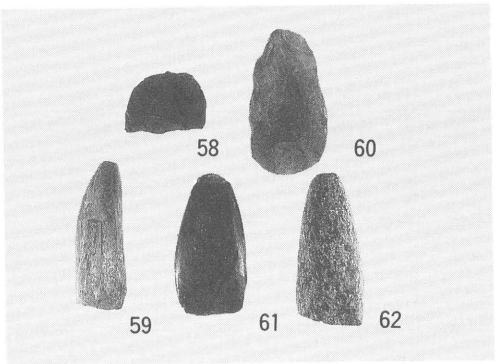






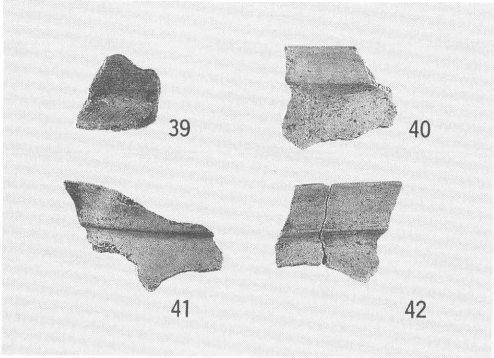


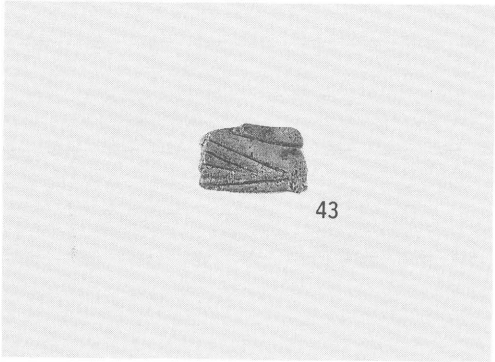


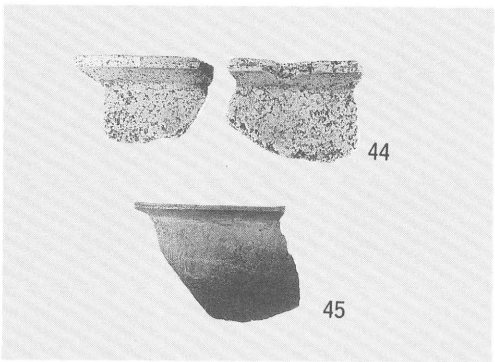


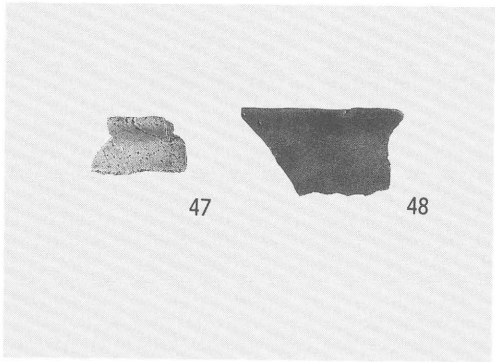
TP17・23出土土器	TP23出土土器
TP17・23出土土器	TP15・17・23出土土器
TP18出土土器	TP15・23出土土器
TP5·12·15·17出土石器	

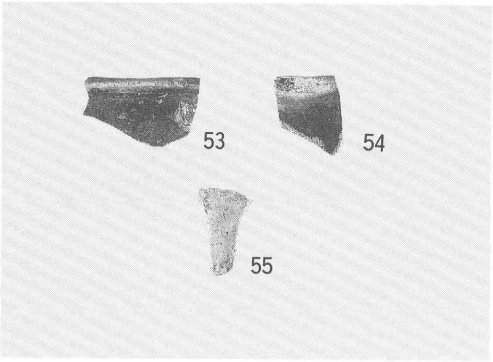
図版 6

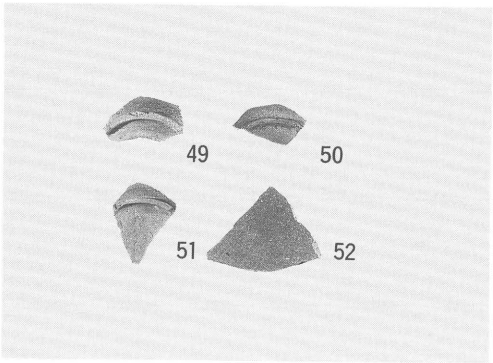


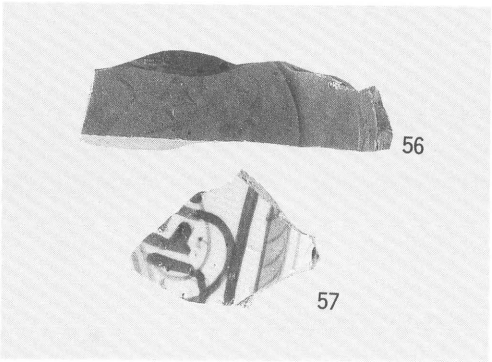












TP 2・6・7出土土器	TP13出土土器
TP 4・6出土土器	TP 2・9出土土器
TP 2・5・12出土土器	TP 6・7・15出土土器
TP 6・16出土土器	

津和野町埋蔵文化財報告書
高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書

平成３年３月　印刷・発行

編集・発行　津 和 野 町 教 育 委 員 会
TEL (08567)2-0300
印　　刷　津和野町　（有）坂田印刷所
TEL (08567)2-0064